

# クリスチャンカルト

ジェイコブ・プラッシュ

## ● インTRODクシヨン

マタイ 24 章・ルカ 21 章のオリーブ山の訓戒でイエスさまは偽教師、偽預言者、偽クリスチャンに関して警告されました。私が救われて間もなかった頃、その箇所を読むと私の頭の中にはエホバの証人やモルモン教などのことが浮かびました。今世紀になって、また特に過去この 20 年間でカルトが急増していることは紛れもなく聖書の預言した通りであり、そのことに疑問はありません。ですが、それはイエスさまが主に警告していた偽教師や偽預言者ではありません。イエスさまは終わりの時代に現れ、選ばれた者たちをも騙そうとする者たちのことを語っていました（マタイ 24 章 24 節）。

もちろん選ばれた者たちが騙されるなんてあり得ないという人たちがいます。ですがそれ自体が嘘です。起こりもしないことをイエスさまが何度も警告することはありません。それはそうとして、イエスさまはクリスチャンを騙す人たちに関して警告していました。モルモン教やエホバの証人に騙される人がいるなら、それは救われて間もない人か、物事を何も知らない人たちです。救われて 3 年、4 年、5 年経った人たちはそのような人たちの犠牲にはなりません。

## ● 人から始まる

カルトにも神学的な「カルト」と社会的な「カルト」があります。ですが、この二つはどこかの時点で必然的に合流し、ひとつとなります。

**あなたがたはめいめいに、「私はパウロにつく」「私はアポロに」「私はケパに」「私はキリストにつく」と言っているということです。キリストが分割されたのですか。あなたがたのために十字架につけられたのはパウロでしょうか。あなたがたがバプテスマを受けたのはパウロの名によるのでしょうか(1 コリント 1 章 12 節－13 節)**

人々は「パウロにつく」、「ケパにつく」、「アポロにつく」と言っていました。「私はキリストにつく」と言っていた人たちは「どんな指導者をも認めず、指

導者の必要性も感じない。イエスが私たちのリーダーだ。牧師の権威など認めない」と考えていました。人々は「私はあの人につく、あの人につく」と言い、人を教祖に祭り上げてしまいました。

カルトの行うことは、関心を人間に向けること、時には死人に向けることです。今日のカルト——福音派のカルト——でも創始者が生きていた時より、死んだ後のほうが人気のあるカルトが存在します。

アッセンブリーズ・オブ・ゴッドはウィリアム・ブランナム (*William Branham* ※1) が生きていた時にも彼の考えを退けました。E・W・ケニヨン (*E. W. Kenyon* ※2) の考えはペンテコステ派主流にとっては忌むべきものでした。「神の子たちの現れ・後の雨運動」、「再建主義、神の国は今」などのようなものは、40年代から50年代のアッセンブリーズ・オブ・ゴッドを含め、ペンテコステ派主流によって一般的に退けられていました。カルトと見なされていたのです。これらかつてはカルトや異端と見られていたものは、現代急激に台頭してきており、今日でもブランナムを信奉する者たちがいます。

カルトのリーダーは死んだ人物であることもあります。それはエホバの証人やモルモン教のようなカルトのことではなく、真実の福音を信じる人たちのカルトです。人がそのような団体の中で救われると問題が発生します。モルモン教徒が救われても何ら問題はありません。ジョセフ・スミス (*Joseph Smith*) は偽預言者だと分かっているのに、モルモン教全体も偽りの道に入っていることが分かります。エホバの証人が救われても何ら問題はありません。チャールズ・テーゼ・ラッセル (*Charles Taze Russell*) も偽預言者だったので、ものみの塔も終わっています。ですが「クリスチャンカルト」を通して人が救われると大きな問題が発生します。クリスチャンカルトとは神学的には「教会」ですが、社会的に「カルト」である団体です。

そのように神学的にだけ「教会」で、社会的にカルトである団体は次第に異端的になってきます。背教的な教えに引き込まれていくのです。ですがそのような団体も最初は真実の福音をもって始まりました。

このような団体を通して救われると、人は真に新生したために、指導者が霊的、心理的な影響を強く持ち、指導者からコントロールされるようになります。

私は「神の子ら (*The Children of God*)」という団体を通して新生しました。

クリスチャンになって最初の 5 年間はそのような団体と関わっていました。もうひとつは「聖書を理解する教会 (*The Church of Bible Understanding*)」というものでした。また別のクリスチャンカルトは「聖書は語る (*The Bible Speaks* 別名 *Greater Grace*)」というものでした。そのようなカルトがなぜそれほど危険かという、真実の福音を伝えているからです。エホバの証人やモルモン教を排除する方法でそれらは排除できません。大きな問題がそこにはあります。その団体に属している人と、そのような団体を通して救われた人は束縛の下にあります。霊的に、そして心理的にも縛られてしまうのです。

### ● カルトの第一のしるし

パウロなど使徒たちがこのような精神に反対していたことに注目してください。パウロがあなたを救ったのでしょうか？救いをもたらしたのはイエスであって、福音であり、教会ではありません。ローマ・カトリック教会は救いの道具だと自称し、司祭によって執り行われた秘跡によって、人が救われると教えています (エクス・オペレ・オペラート)。これらの団体はキリストを宣べ伝えますが、キリストとその団体との区別はつけません。

パウロは後にガラテヤ人への手紙で「肉の行ない」(ガラテヤ 5 章 19 節)「党派心 (20 節)」と呼んだカルトの第一の性質を非難していました。

「党派心、分裂、分派」(ガラテヤ 5 章 20 節) カルトの第一のしるしはパウロが「党派心」と呼んだものです。党派心の罪は、特定の団体が自分たちだけが聖書の真理を握っていると主張するところに発生します。党派心を生むもののひとつにグノーシス主義があります。グノーシス (*Gnosis*) とは「神秘的知識」を表すギリシア語から来ています (1 テモテ 6 章 20 節「靈知」)。

ローマ・カトリック教会内にあるグノーシス主義は「センス・プレニア (*sensus plenior*)」——聖書の「完全な意味」というものです。聖書にはより豊かな意味があることは事実ですが、ローマ・カトリック教会の主張していることは、教皇がペテロの後継者であるために、みことばの意味を間違いなく定義でき、それを基礎に教理を作ることが出来るということなのです。

グノーシス主義においては、聖書の釈義が大事なのではなく、聖書について語る**指導者**の言葉が重要視されています。

ジョン・ウィンバーの運動である「ヴィンヤードムーブメント」は初代教会にも存在したクリスチャンのグノーシス主義に基づいています。例えば、ヴィンヤードや後の雨運動、カンザスシティーの預言者などの基本的な教えは、再建主義であり、「ヨエルの軍隊」と呼ばれるものです。

「町を襲い、城壁の上を走る。  
主の命令を行なう者は力強い」

これはいなごに譬えられています。歴史的な背景からこれはネブカデネザルの軍隊で、悔い改めないユダを裁くために神が用いた軍隊です。ですがこれはまた黙示録に登場する反キリストの軍隊の象徴でもあります。ヨエル書に登場したいなごは黙示録でも再び現れています。それゆえ、この軍隊が何であれ、終わりの時代に登場する反キリストの軍隊であり、ヨエル書 2 章 20 節には「わたしはこれを滅ぼす。その臭いは天にまで立ち上る。それを西の海に追いやろう」とあります。ヴィンヤード運動はこれが自分たちだと教えています。神に裁かれ、滅ぼされる軍隊に入りたいと思う人たちがもしいるなら、ヴィンヤード運動に入るべきです。神の子たちの現れや後の雨運動もしかりです。

彼らにとっては**聖書**が何を語っているかは問題ではありません。**神秘的知識**が語ることだけが重要なのです。「神さまが**私だけ**に見せてくださった」というようにです。

コーブランドとヘーゲンと共にケニヨンの教えに頼っています。イエスさまが十字架上で「完了した」（ヨハネ 19 章 30 節）、また「父よ。わが霊を御手にゆだねます」（ルカ 23 章 46 節）と言ったにもかかわらず、ケニヨン信奉者たちは「十字架上ではイエスさまではなくサタンが勝利を得たという啓示を、**私は**受けた。イエスさまは三日三晩地獄で拷問を受け、サタンとひとつの性質となり、そのサタン付きのイエスさまは地獄で新生し、死人からよみがえった」と主張します。このようなものはイエスと全くの別人物であり、買い取ってくださった主をも否定する偽りの福音です。

繁栄の説教者たちもそうです。「神は**私**に啓示を与えて下さった」と言いますが、これらはみなカルト的です。

**それには何よりも次のことを知っていなければいけません。すなわち、聖書の預言はみな、人の私的解釈を施してはならない、ということです。な**

ぜなら、預言は決して人間の意志によってもたらされたのではなく、聖霊に動かされた人たちが、神からのことばを語ったのだからです(2 ペテロ 1 章 20 節－21 節)

この節の直後に「パレイサズーシン (*pareisazousin*)」——「偽りの傍に真理を置く」というギリシア語が登場します。そのような人たちは聖書預言の解釈などを自分の解釈次第であるかのようにみなしてしまっています。それゆえ聖書が何を語っているかが大事なのではなく、その指導者がどう語っているかが重要視されているのです。

### ● 人の上に立とうとする者たち

これらの二つの特徴（党派心とグノーシス主義）が重なれば、第三のものが来るのも時間の問題です。

イエスさまはニコライ派の行いを憎みました（黙示録 2 章 6 節）。ニコライ派がどのような人たちであったか歴史から知ることは出来ません。使徒 6 章に列挙されている執事たちのうちの息子がニコライで、ニコライ派は彼に従っていたのではないかという推測がありますが、誰も分かりません。このような話は伝承から来たものです。ですが私たちが知ることが出来るのは「ニコライ派」のギリシア語における意味です。「ニコス (*nikos*)」は「抑圧」、「ラオディケウス (*laodikeus*)」は「民」という意味です。彼らは自分たちを支配層に押し上げたのです。

次のような主のことばが私にあった。「人の子よ。イスラエルの牧者たちに向かって預言せよ。

(ヘブライ語で「羊飼い」と「牧師」とは同じ言葉です)

預言して、彼ら、牧者たちに言え。神である主はこう仰せられる。ああ。自分を肥やしているイスラエルの牧者たち。牧者は羊を養わなければならないのではないか。あなたがたは脂肪を食べ、羊の毛を身にまとい、肥えた羊をほふるが、羊を養わない。弱った羊を強めず、病気のものをいやさず、傷ついたものを包まず、迷い出たものを連れ戻さず、失われたものを捜さず、かえって力ずくと暴力で彼らを支配した。彼らは牧者がいないので、散らされ、あらゆる野の獣のえじきとなり、散らされてしまっ

## た。(エゼキエル 34 章 1 節－5 節)

聖書的なリーダーシップは模範によるものであり、他者を支配するものではありません。イエスさまはこのことでパリサイ人を強く非難しましたが、これが初代教会にも入り込んでしまっていました。

「党派心」のあるところには大抵の場合、「グノーシス主義」があります。人々は「あの先生は私たちより聖書に精通しておられるから」と言います。

ある時、本当におかしなことを語る人がいて、完全に異端でした。ですがその人は聖書に関して非常に深い洞察力を持っていました。自分の知名度を気にしている指導者たちに気をつけましょう。本当に賜物のある人が、自己崇拝する人々を容認している時には警戒しましょう。人はそのような人に関して「私たちは先生のおしていることが理解できないが、先生は私たちよりも神に近いお方だ。深い洞察力を持っておられる」と言います。深い洞察力を持っているのは事実かもしれませんが、聖書の語ることと正反対を行っているなら、「あなたがたが仕えようと思うものを、どれでも、きょう選ぶがよい」という状況と同じです(ヨシュア 24 章 15 節)。ですがそのような時点になると、従っている人たちはもうすでに強い束縛の下に置かれています。

次に来るものはニコライ派の行い、重いくびきを負わせることです。「我々に異議を唱え、我々に挑戦するとは君は一体何様のつもりなんだ。君は反抗的な霊を持っている」と指導者は語ります。

### ● カルト指導者の人格

法医学の精神科医も同じことを言うと思いますが、カルト指導者の人格は独裁者の人格とほぼ同じものです。アドルフ・ヒトラーやジョセフ・スターリンを含む多くの独裁者たちに関して、法医学の精神科医による評価が下されました。精神科医の一団が 1940 年代のイギリスやアメリカ連合軍に対するアドルフ・ヒトラーやジョセフ・スターリンの人格評価を行った際、彼らはあることについて意見が一致しました。それはヒトラーやスターリンは、スターリングラードの戦い(1942・1943 年)やバルジの戦い(1944・1945 年)で戦う勇気は持っておらず、強制収容所の人々に強制したことを自分たちが行うのは明らかに耐えられなかつたであろうということでした。

カルト指導者は独裁者のようなもので精神的に不安定です。カルト指導者は人格的に精神不安定であり、より精神不安定な者たちを回りに集めることにより、その人たちをコントロールし、彼らを通して人々のもとに行きます。カルト指導者は、一緒に怒鳴りつけてくれる者無しには、ほとんど誰かと関わろうとしません。カルト指導者は基本的に自分の言うことを繰り返すだけのオウムのような人物を送り出します。カルト指導者は精神不安定であり、その部下、代理人もまた精神不安定で容易に操作されてしまう人たちです。

すべての人が同じ訳ではありませんが、ひとつのことは確実に言えます。ある人が新生したなら、その人は霊的に変化し始めます。そして霊的に変化すると、心理的に変化してきます。神は人を内から外へと変えていきます。イエスにあって成長するにつれて、その人はキリストにあって安定していき、共にキリストにある者たちと和合するようになります。クリスチャンのカルトではこれが起こりません。クリスチャンのカルトとは神学的には「教会」ですが、社会的に「カルト」である団体です。その人たちはキリストにあって安定することがありません。彼らの安定は指導者との関係性に基づいてしまっています。程度の差こそあれ、カルトに属する者はすべて同じです。

再建主義神学に陥っている大半の「ハウスチャーチ運動」は、どの程度カルト化しているかで差があるだけです（1990年代から始まったハウスチャーチ運動は、新使徒改革を通してキリストが再臨する前に、この世に神の国を打ち建てることを目指してきました。その中で悪名高いのがピーター・ワグナー、シンディー・ジェイコブス、リック・ジョイナー、ビル・ジョンソンです）。みな同じ道をたどっています。そのようなハウスチャーチ運動とエホバの証人やデビッド・コレシュが違う点は、ただ彼らの方がより深く堕ちて行っているということだけです。神学的には「教会」であっても社会的に「カルト」である教会は時間が経つと**確実に**異端の教えを持つようになります。ささいな誤りではなく、根本的な誤りです。「神の子ら」もそれをし、「聖書を理解する教会」もそれを行いました。時間が経つとそのようなものは教理的誤りに陥るのです。しかしそれはただの始まりに過ぎません。

このような人たちは精神的に不安定なので、自分たちが知らないことを知っている人を恐れます。

私たちは教育を崇拝すべきではありません。アポロとパウロは正式な学問がりましたが、ペテロとヨハネはそうではありませんでした。そうであっても

ペテロとヨハネの持つ使徒の権威はパウロのものに劣ることはありませんでした。しかしながらペテロは手紙の中で「これらのことは複雑だ。パウロがそれらを説明するほうが良い」と語っています（2 ペテロ 3 章 15 節－16 節参照）。

ある人の知性が十字架にかけられ、知性に頼らず、キリストに頼ることを学べば、知性はとても良いしもべとなります。「知性」は良いしもべですが危険な主人です。ですが「無知」は死をもたらす主人です。「知性」は良いしもべですが悪い主人です。「無知」は悪いしもべであるだけでなく、死をもたらす主人です。

このような人たちが神学校や聖書学校、ギリシア語を読める人々を無意識のうちに貶めるのが見受けられるでしょう。彼らはその人々を恐れるでしょうから。彼らは自分の知らないことを知っている人々に会うと、自分の団体の中でその人々を貶め、卑下し、笑い者にせずにはいられないでしょう。彼らは原語のギリシア語やヘブライ語を読み、神学校に行った人たちが自分たちにとって脅威であると知っています。それは独裁者たちと同じです。彼らは自分が持っている知識を持つ者を恐れるので、結果その人たちを貶めるのです。「そんなもの必要無い」と彼らは言います。そしてそれ自体は事実であることを言います。「大学には博士号を持ち、ギリシア語やヘブライ語が読める者が多くいるが、彼らは地獄へ向かっている。彼らは救われてもいない」彼らはその点を強調しますが、コインの裏側を見ようとはしません。彼らは人をコントロールするのに見合うことだけを強調します。

独裁者やカルト指導者たちを見ると、彼らは自分自身が精神不安定であるために、人々を同じく精神不安定にすることによってだけコントロールすることが出来ると分かります。

## ● 教理の誤りを越えて

最終的に彼らは教理の誤りに陥ります。ですが必然的にある時点からふたつの事柄——両方同時とはいかなくとも——が起こります。最初のものはエゼキエル 34 章に記されたような金銭的不祥事です。「あなたたがは私腹を肥やすために羊をほふるが、彼らの生活を見てみなさい」（エゼキエル 34 章参照）

ひとつの例が、ネズミが出るような犯罪率が多いスラムに信徒たちが住む一方で、5 機の飛行機を保有し、バハマで二人目の妻と休日を楽しんでいる指導者

です。ある人はニューヨークシティーの劣悪な地域に住み、一日 14 時間カーペットを掃除し、すべてのお金をそのカルトに寄付しています。その寄付の名目はハイチに住む子供たちに与えるためだといわれています。もしかすると寄付金の一部がそこに届いたかもしれませんが、確実にそのお金はその指導者と彼の妻しか乗らない 5 機の飛行機のために使われたことでしょう。

金銭的不祥事が最初のもので、そこには大抵の場合、格差が見受けられます。奉仕は仕える立場であるはずなのに、牧師たちは「先生」と呼ばれる荣誉と、世俗社会では得られない金銭的な地位を得ようとしています。世界的に見て、これらのことはペンテコステ派の牧師たちの中に見られ、神学的な理解はないがしろにされ、お金や繁栄が強調されています。(このようなことは、仏教カルト「幸福の科学」にも見られるものです。神道の神官でも家から霊を追い払う振りをして、人を恐れさせ、お金を巻き上げています)

このような人たちの中に多くの場合、見受けられる二つ目のものは性的不祥事——性的不品行です。それは明らかになるまで、ある期間は内密に行われず。

短期的にカルトを見ると、これらが脱出するための警告です。そこにはある形でグノーシス主義と関連した「党派心」の罪があります。そして他者が気付いてこなかったとする教理の偏りがあり、支持者たちはそれに傾倒しなければなりません。その時点で脱出しなかった場合はその次に金銭的不正があり、金銭の搾取があります。非常に多くの場合、金銭の搾取を行うためにその人たちは什一献金などの聖書の教えを歪曲します。そしてそこには不品行——大抵の場合性的なものがあり、異常な性的嗜好を持つ者までが時には存在します。

## ● どのようにして生じるのか

新約聖書から読み取れるサタンの最初のトリックは、4 世紀に教会を異教化する以前、教会をユダヤ教化することでした。といってもこれは教会を「ユダヤ化」することとは違います。教会は事実神学的にユダヤ的なものだからです。イスラエルは本来の根です (ローマ 11 章)。聖書はヘレニズムの観点から理解されるべきではなく、ユダヤ・キリスト教の観点から理解されるべきです。主はみことばをご自分の民、文化を持つ国を通して啓示されたため、私たちはそれを理解しなければなりません。聖書的キリスト教を理解するためには、聖書のユダヤ教をまず神学的に理解することが必要不可欠です。イエスさまは律法

を成就されました。サタンの最初の誘惑は人々を律法の下に置くことであり、本来キリストを指し示すものとしての律法を違った形で用いることでした。

これは慣習とは違います。イスラエル系ユダヤ人の家族を持ち、ガラリヤで生れた子供を持つ者として、私たちは文化のためと、未信のユダヤ人への証のために過越の祭りを守っています。ドアにはメズザーもあり、家庭でヘブライ語を話しています。ハヌカを祝えば、プリムも祝い、ユダヤの祭りの多くを祝います。私たちは日曜に教会に行き、土曜日——安息日にはメシアニック系の交わりに参加します。従ってサタンが教会をユダヤ教化したということは、自分の文化の中でユダヤ人に福音を伝えようとして文化を守ることとは違います。これは間違っていない。また第一コリント人への手紙 9 章でパウロが語っているような、証のために文化を採用した人たちによるユダヤ人への伝道も同じです。問題となってくるのは律法を守ることが、救いや聖化に必要不可欠だと誰かが主張する時です。そのような人たちは「あなたたちは恵みによって救われたけれど…」と言います。

律法を守ることが救いに不可欠と言われる時にはそれは「律法主義」に陥っています。聖化のために不可欠と言われる時、また救われた人があれやこれをしなければならぬと言われる時、それは「ノミアン主義 (*Nomianism*)」と呼ばれます (その言葉はギリシア語の「ノモス」から来ています)。

今日、二つの契約の下で生きようとしている二種類のグループに気をつけなければなりません。ひとつはメシアニック運動の過激派です。これにはアーノルド・フルクテンバウム (*Arnold Fruchtenbaum*) のようなメシアニックの良い教師や、新約聖書のユダヤ的背景の理解を助けている人たちなどは含まれていません。またユダヤ人に伝道するためにユダヤ的文化の枠組みで礼拝している人たちもこれには含まれません。問題なのは、律法を守ることが義務だと教える人たちです。

デイビッド・クリス (*David Kriss*) という人がメルボルンにいますが、彼は危険な人物です。しかし彼だけが過激派メシアニックではありません。イングランドでは最終的に刑務所に入れられたフィリップ・シャープ (*Philip Sharp*) という人がいます。彼はイスラエル人の妻と子供を捨て、集会で自分を王なるメシアとして崇めさせていました。彼は「メシアニック・ジューイッシュ・ラビ」でした。ある人たちは狂っています。クイーンズランドにはある種のハラハー共同体がありますが、私はそこに近づくことさえもしたくありません。

再度強調しますが、これにはアーノルド・フルクテンバウムやアルト・カツツ (*Art Katz*) のような人は含まれていません。私は良い人たちのことを言っているのではなく、おかしい人たちのことを指摘しています。ですがメシアニック・ジューだけが隔ての壁を再建しようとしているわけではありません。二つの契約の下で生きようとする人たちが他にもいます。それはセブンスデイ・アドベンチストです。デイビッド・コレシュ (*David Koresh* 信者の集団自決を引き起こしたカルト指導者) の信奉者たちの大半がセブンスデイ・アドベンチストでした。

二つの契約の下で生きるような、深刻で根本的な教理の誤りに陥ると、人はさらに深刻な誤りに陥りやすくなります。いったん根本的な教理の誤りに陥ると、自動的にその人はより深刻で、より危険な誤りに対して無防備になります。ただそこにあるのは程度の違いだけです。

デイビッド・コレシュについて記された記録を読むと信じ難いものですが、福音派のカルトでも不可解な事を人々に行わせたものがあります。コレシュの惨劇 (ブランチ・ダビディアン事件) が起こった後、私はインターネットから 129 ページの文章記録をダウンロードし、注意深く読んでいきました。デイビッド・コレシュはカルトリーダーの完全なパターンでした。セブンスデイ・アドベンチストたちは新生し、救われていると言いますが、その中には多くの偽りの教えが存在します。「党派心」やニコライ派の行い、律法の下に戻るなどです。コレシュは一日 13 時間の聖書の学びを行い、いつもそれは黙示録についてであり、彼自身についてでした。学びの途中に聴衆が注意を向けていなかったり、うたた寝をしようものなら、彼は凶暴に怒り、椅子や物を投げ付けていました。その聖書の学びは「来るべき終末の大変動」のために人々を洗脳し、——かつて一度も直接的には言われていませんでしたが——それから逃れ、救われるためにはコレシュとの関係を保たなければならないとほめかしていました。

コレシュの信奉者たちは深く洗脳されていたので、FBI との銃撃戦が始まった時でも、それが黙示録に書かれてある世の終わりだと考えていました。もちろん、最初からそれほど洗脳されていたわけではありません。人々をこのような狂気に駆り立てたのは何だったのでしょうか。コレシュは自分を唯一の権威を持つ者として掲げました。信奉者たちはコレシュが神に等しい者だと信じていました。ここでグノーシスが登場します。彼の精子だけが神によって聖別さ

れていたのも、**彼だけ**が子供を作るべきだと考えられていました。コレシュは婦人や子供たちに主人たちを尊敬させまいと考えたので、彼らを辱めるためにあらゆる事を行いました。コレシュは**自分だけ**の権威を認めさせようとしていたのです。彼は魅力的な女性を集会の前に立たせ、その女性にドレスを男性たちの前でまくり上げさせ、「今情欲を抱いた者は誰だ」と言って、情欲を抱いたことで男性を公に脅していました。彼は本当に狂った男でした。

コレシュは上階に自分だけの寝室を持っており、男性たちは軍隊の兵舎のような場所に寝泊まりする中、その場所には呼び出された女性のみが上がって来ることができました。それもいつも大人の女性というわけではなく、11歳という子供も含まれていました。殺された人たちの多くは疑うことなく、彼と女たちの間に出来た子供たちだったでしょう。女性たちに夫を霊的権威として尊敬させないため、男性たちを叱りつけていました。

コレシュは女性をも辱めました。また違う方法によつてです。彼はセブンスデイ・アドベンチスト式の食物ルールを作り、定期的に修正していました。従つて信者たちが買い出しに行き、間違つた種類の鶏肉などを買うと、彼は思い切りわめき立て、名前をリストを貼りだしました。誰でもそこに名前を書かれた女性は裸にして並ばされ、へらで叩かれました。リストに名前が載れば毎日でも並ばされてきました。その後女性たちは子供たちの前に衣服を付けずに出てきて「悪いことをしたお母さんにどんなお仕置きが下つたか見ましたか」と言わされたものです。

どのようにしてこのような狂気に至つたのでしょうか。人が自分の11歳の娘を誰かに渡すようなことをし始めると、必然的に次のステップはその人のために死ぬようになります。これはどのようにして始まつたのでしょうか。ひとつの深刻な偽りの教理からです。ひとつの深刻な偽りの教理に陥ると、次のものに陥るのは防ぎようがありません。

『Kingdom of the Cults (カルトの王国：ウォルター・マーティン著 1965年に出版されたカルト全般に関する著書)』やジョセフ・スミス(性倒錯者のひとり)の行つたことを読むと、カルト内で歪曲した性は大きな問題であることが分かります。

本当のモルモン教徒は原理主義者たちです。原理主義者たちは本当にブリガム・ヤングとジョセフ・スミスに従つていました。モリエル USA がユタ州マン

タイでモルモン教徒に対して伝道を行っていた時、私は 8 人の妻を持った男性に出会いました。このような男たちはどのようにして女性たちを従わせたのでしょうか。結婚した時に何歳であったかを想像してみると理解に苦しむことはありません。このような男たちは小児愛者たちなのです。

## ● 救われた信者が同じことを行う時

デイビッド・コレシュやモルモン教徒たちよりも恐ろしいのは、新生したクリスチャン——救われたクリスチャンが同じことを行う時です。

1978 年のニューヨークポスト紙の一面にそのようなことがありました。ミネソタ州でルーテル派から分かれ出たルーテル福音派の教会が、子供たちを金属製の椅子に縛り付け、電気ショックを与えていたという事件がありました。彼らがそのようなことを行ったのはその子供たちが教会学校で話を聞いていなかったためだと言い、教師たちが電気ショックを与えている間、両親たちは黙って見ていたというのです。

また違う例は、カリフォルニアで悪霊を追い出すために信徒が打ち叩かれていた事件がありました。そのような人たちは打ち叩かれることさえ受け入れていました。

イングランドにいる時、ジブラルタル出身で私たちの聖書の学びに数回訪れた、法律を学ぶ女子学生がいました。彼女はスペイン語が話せました。ですが卒業すると彼女は「ライマ」というカルトに関わるようになってしまいました。彼女がスペイン語を話せたため、シカゴのスペイン語を話す人たちがいる貧民街に遣わされました。ですが彼女の友達はその団体について懸念を抱いていました。それも根拠の無い懸念ではありませんでした。その団体に属する人たちは救われたクリスチャンでしたが、同じパターンのグノーシス主義、重いくびき、ニコライ主義などがあり、すべてのお金はその団体に流れていました。その女の子は二カ国語を話し、教育を受けていたため、同じ団体の他の女性たちよりも自由がありました。彼女は私たちに会いに来ることも許されていました。

この団体では指導者たちは、HIV 陽性の異性と信仰によって結婚し、ただ主に信頼しなさいと教えていました。彼らはエイズを持った人たちと信者を結婚させていたのです。そんなことをすればエイズ感染が引き起こされます。子供が生れても HIV 陽性で死んでしまいます。その指導者たちは結婚を仲人し、そ

の結婚する当人たちに結婚証明書と同時に、実質的に死亡証明書を書かせていました。これは殺人です。ですが彼らは新生したクリスチャンだったのです。

私はその女の子を妻のところに連れて行き、彼女と話し、イングランドにいるその人の両親と電話で話しました。そして彼女をカルト脱会の奉仕団体に連れて行き言いました。「ここにかくまって、外出させないようにしてください。明日また来ます」私は50ドル程のお金を渡して、イングランドに戻る飛行機チケットを手に入れました。私は保護者に電話をした後、彼女をオハレ国際空港に連れて行きました。

その団体は HIV を持った人との結婚を勧めていたのです！どのようにしてこの種のコントロールが出来たのでしょうか。それは一夜のうちに始まったのではありません。ニコライ主義は、グノーシス主義に関連した党派心から始まったのです。

## ● さらにもう一步進む

イエスが我々の知恵である（1コリント1章30節）ことを忘れてしまうと、知恵のために人に頼るようになってしまいます。信者たちがベレヤの人たちのようでなくなり、物事を試すことを止めると、自分の人生のコントロールを人間に明け渡してしまいます。しかしそのような主導権を他の人に握らせるのは、神さまのみこころではありません。（といっても神はご自分を押しつけることや、人を操作することはありません）

そのような状況になると、誰かが非聖書的なことを語り、行っている人も人々は疑問を抱かなくなります。不品行な事を語り、行っている人も疑問を持たなくなるのです。合理的に考える能力を失ってしまいます。再度強調しますが、「クリスチャン」と名乗っているカルトと、明らかな偽クリスチャンの宗教との違いはただ程度の違いだけです。

昨年ユタ州でモルモン教徒の多くが次のように書いてあるTシャツを着ていました。「ブリガム・ヤングが語ったのだからそれを信じる。ただそれだけだ」エホバの証人に関して言えば、彼らは追い詰められるといつも話題を変えます。そのように訓練されているからです。モルモン教徒といえば、彼らは自分の証、主観的な宣言に頼ります。「私は心に重荷があつて、末日聖徒キリスト教会が真実であると心が証しています」これで全ての問題が解決すると思われています。

どれだけ多くの論理的な議論をしようと、また彼らがそれに答えられなくても、彼らの「証」が最終的な説明となっています。これは完全に主観的なものです。

私がユタにいる時にあるモルモン教徒にあったので、「そのTシャツ良いですね」と言うと、彼らは「ハレルヤ」とか何か言っていました。ですが私はそこでこう言ったのです。「じゃあ、あなたはクエーカー教徒たちが月に住んでいると信じるのですか？ブリガム・ヤングが言ったなら信じるのでしょうか。みなさん、この人はブリガム・ヤングが月にクエーカー教徒が住んでいると言ったからそう信じていますよ」モルモン教会の説教集 (*Journal of Discourses*) から月にはクエーカー教徒たちが住んでいて、彼らの年齢は1千年だとブリガム・ヤングとジョセフ・スミスが言っていたと見せました。ブリガム・ヤングはクエーカー教徒たちが太陽にも住んでいると教えていたのです。

私は黒人のモルモン教徒を見かけて、こう言いました。「新約聖書は非ユダヤ人で、キリストを初めて受け入れたのは、エチオピアからのアフリカ系黒人だったと語っています。非ユダヤ人の背景から初めて救われたのは黒人の人だったのですよ。でもモルモン教会が教え、ブリガム・ヤングが黒人について語っていたことを知っていますか？あなたが墮落した天使の子孫で、醜く、有害で、下劣な者だと言っていたのですよ。あなたはどちらを望むのですか？あなたを愛してくださるイエスか、黒人の人たちを醜く、有害で、下劣、墮落した天使の子孫だと言い、人種差別的な名前と呼ぶモルモン教徒のどちらに従いますか？ほら、ここでブリガム・ヤングがそう言っているでしょう。でもそのTシャツを着ているから信じているっていうことじゃないですか。神が肌を黒くしたために、醜く、有害で、下劣な者だと言われているのですよ」そうするとそのモルモン教徒は、「私は燃える心を持って証します。末日聖徒キリスト教会は真実です」と言ったので、私はそれに答えて、「月にクエーカー教徒たちが住んでいるのを、私は燃える心を持って証します！」と冗談で言い返しました。論理などとうの昔に無くなってしまっています。聖書の明白な教えも存在していません。主観論が入り込んで来ているからです。

## ● 慎み深い考え

万物の終わりが近づきました。ですから、祈りのために、心を整え身を慎みなさい。(1ペテロ4章7節)

ロドニー・ハワード・ブラウン (*Rodney Howard Browne*) とコーブランド

(*Copeland*) のビデオを思い出してもらおうと、彼らは「酔っ払いなさい。祈ってはならない」と言っています。

私たちは心を整えるために、御霊に酔うべきでしょうか。それとも御霊にあつて身を慎むべきなのでしょう (1 ペテロ 1 章 13 節)。

**身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたける獅子のように、食い尽くすべきものを捜し求めながら、歩き回っています。(1 ペテロ 5 章 8 節)**

私は一度、ザンビアとジンバブエの境にあるビクトリア滝の近くを四輪駆動車に乗り、メッセージをする教会へ向かっていました。そしてやぶを通って行きました。そこはライオンの国で、キリンが見えました。運転手は私に「暗くなってきただろう。夜のこの時間にライオンはあんなキリンを狙うんだ」と語っていました。そこでライオンがいないか外を見てみると、突然タイヤがパンクしました。あたかもその時「身を慎みなさい。ライオンが襲おうとしています」と言われているかのような感じでした。ウイスキーが欲しい時がかつてあったとしたらその時ぐらいでした。これはターザンの映画ではなく、**本当のアフリカ、本当のやぶに、本物のライオンがいたのです**。そこはもう暗くなっていて、本当に怖い思いをしました。しかし、一番あつてはならないことは、酔って無用心になってしまうことでした。

三度ペテロは「身を慎みなさい」と言い、パウロも「あなたは、どのような場合にも慎み」と語っています (第Ⅱテモテ 4 章 5 節)。ペンテコステで弟子たちは酔っていたとトロントの集会では教えられましたが、ペテロは酔っていないと言っています (使徒 2 章 15 節)。人々は神の驚くべきみわざを聞いたのであつて、酔いどれの止まらない笑いではありません。従つて、聖書は繰り返し、身を慎むように教えており、ロドニー・ハワード・ブラウンが言うような御霊に酔う状態になってはいけなさと語っているのです。

メルボルンのフェイスランドにいる牧師には、友人でトロントにはまっているペンテコステ派の牧師 5 人がいました。私がメッセージを語ったことのあるいくつかの教会は、どれもロドニー・ハワード・ブラウンにはまってしまうました。私がトロントでのハワード・ブラウンやコーブランドのビデオを彼らに見せると、彼らはそこに映っている内容を擁護することは出来ませんでした。彼らはその人たちの教えが異端で、肉的、さらに悪霊的だと分かっていた

が、それでもハワード・ブラウンを見にトロントに行くと言い張っていました。どうしてでしょう。彼らはただ盲目なのではなく、**自分から**目を閉じてしまっているのです。彼らは会衆全体を過ちに導く指導者です。群れを過ちに導いたため、第一ペテロ 5 章にあるようにイエス・キリストが彼らに責任を問われます。

御霊の実は自制（ギリシア語でエンクレーター）です（ガラテヤ 5 章 22 節 - 23 節）。この箇所をペテロが言った、「身を慎みなさい、身を慎みなさい、身を慎みなさい」という言葉と共に見せましたが、彼らの応答はどうであったでしょう。彼らの応答は聖書的でもなければ、論理的でもありません。ですが確実に彼らの応答はカルト的でした。「とても祝福されました！あの集会は正しいですよ。私に起こったことを見てください」モルモン教徒は何と言うでしょう。「私は心に燃えるものがある。だから真実なんだ」このようなものは論理的ではありません。論理が聖書と共に見当たりません。両者にあるのはただ程度の違いだけなのです。

アッセンブリーズ・オブ・ゴッドとモルモン教徒の間にはほとんど違いはありません。彼らは両者共に同じ道を辿り、どれだけ同じ道を進んだかだけが違います。アッセンブリーズ・オブ・ゴッドの中には個々の良い教会もあります。ですが私の意見では、彼らはそこから出てくるべきです。彼らは同じ道を進んでいるからです。ただ違うのはどれだけ進んでしまったかだけです。

## ● 同じ道を辿る

カルトで現れている心理的束縛は、悪霊的な性質を持っています。人々がカルトから脱会すると、そのカルトに留まっている人たちから自動的に排斥されます。カトリックがそうです。唯一の真理なる教会から離れ、死に至る罪を犯したのだから、そのまま地獄に行くと言われます。それでおしまい、赦されない罪だと言われるのです。また他の人は離れていく方が人が自由になり、自分たちが束縛の下にあるという理由で敵意を抱きます。ですが組織を離れた人も自由なのでしょうか。すぐさま自由になれるとは限りません。

カルトから脱出した人は非常に混乱していて、傷付けられ、操られていたの、自分の中からカルトの考えを除き去るには長い時間がかかります。それは「ホテル・カリフォルニア」の歌詞のようで、「いつでもチェックアウトできるけども、決して離れることはできない」ような状態にあります。カルトから出

することはできますが、カルトの考え方を除き去るのは容易ではありません。彼らは心理的また霊的な束縛の下にあります。特にそのカルトの中で救われた場合にそうです。そしてその人たちは他の教会に適応できません。それは自分たちが経験したことを他の教会が分かってくれないからです。心の中には密かな恐れがあります。「彼ら（カルト）のほう为正しかったらどうしよう」このような葛藤は時に何年も続くことがあります。

時に人はカルトの考え方により、ノイローゼになり、精神的に病んでしまいます。そこである人はアルコールや薬物に走り、ある人は自殺をしてしまいます。そのために結婚が破たんしてしまうこともあります。

もうひとつのよく起こる状態は、カルトを脱出した人たちがひどく傷付けられ、騙されてきたために、もう他の教会や他の指導者を信じられなくなるということです。その人たちは全ての教会が悪いと思ってしまうので、教会に行かなくなります。指導者全てが悪いので、指導者などいらないと思ってしまうのです。ですが、悪い指導者に対する解決策は良い指導者を探すということであり、悪い教会への解決策は良い教会に行くということです。しかし人はこれを受け入れることができません。他の人たちはその人が通ってきたところを理解できないからです。どんなことを心の中で悩んでいるか理解してもらえません。教会には来ていますが、何かふとしたきっかけが無い限り教会に馴染むことができません。ですが、そのきっかけは遅かれ早かれ起こります。

このような問題は現代非常に大きくなっており、イエスさまが戻って来られる前にも大きくなり続けることでしょう。

社会心理学者のレオン・フェスティンガーという人によって系統立てられた考えがあります。彼は宗教社会心理学に興味があり、その中で起こる現象を「認知的不協和」と名付けました。彼がクリスチャンであったかどうか分かりませんが、非クリスチャンの社会学や心理学でもこの現象を発見しています。認知的不協和とは、重いくびきを負わず異端を人が固く信奉している時、指導者が間違った預言をしても、人は自分の頭で考えその団体を出る代わりに、その異端により固執するようになるというものです。

エホバの証人が戸別訪問でやってくると、私たちは『ものみの塔』のバックナンバーから実現もしなかった預言を見せることができます。そして『ものみの塔』や『目ざめよ』の冊子から、申命記 18 章「預言者が主の名によって語っ

でも、そのことが起こらず、実現しないなら、それは主が語られたことばではない」(申命記 18 章 22 節) と引用されている箇所を見せることができます。彼ら自身の冊子はその聖書箇所を引用しているのです。論理を捨て去るなら、聖書も捨て去ってしまうので、見えなくなります。

ジェラルド・コーツ (*Gerald Coates*) がニュージーランドで起こると言った地震は全く起こりませんでした。エリム (*Elim*) のカルトでは 44 の教会全てがサバイバルのレッスンを受けていました。

リック・ジョイナー (*Rick Joyner*) は著書『収穫』の中で大きな預言をしましたが、大きく外れました。彼は共産主義が優勢になると言いましたが、その 5 ヶ月後に鉄のカーテンが崩れました。

カンザスシティーの預言者と言っているポール・ケイン (*Paul Cain*) とマイク・ビックル (*Mike Bickle*) は、1990 年 10 月にイギリスで歴史上最大のリバイバルが起こると言い、ドイツにも拡大すると預言しましたが、過去 10 年間の間にイングランドでは教会より多くのモスクが建てられています。(今ではそれから 23 年経過していますが、大きなリバイバルは起こっていません)

ベニー・ヒン (*Benny Hinn*) のような偽預言者はニュージーランドで偽りの預言をして、フィル・プリングル (*Phil Pringle*) と共にオーストラリアでテレビに出たロドニー・ハワード・ブラウンはリバイバルを預言しましたが、実現することがありませんでした。このように預言をし、実現しなかった者はどう扱われるべきなのでしょう。申命記 18 章はそのような者から離れ、恐れてはならない。何も関係を持つなと語っています。ですがカルトではそれが問題視されません。

エホバの証人やモルモン教徒たちがしている事と、ベニー・ヒンやロドニー・ハワード・ブラウンに聞き従っている人たちに少しでも違いがあるのでしょうか。全く違いはありません。前者はただ同じ道をより進んでしまっているだけです。これが「認知的不協和」と呼ばれるものです。非クリスチャンの心理学でも認められています。この世でもそれが何かを知っているのです。カルトの信奉者はよりカルトに忠実になっていくのです。

彼らは預言が外れると、言い訳として別の日付を設けたりします。そしてその別の日付も外れるのです。エホバの証人がその一例です。

このような人たちは長年リバイバルを予告してきました。ですがリバイバルが一向に起こらないので、次のリバイバルを予告します。トロントが成功しなければ、アルファコースに。アルファコースが上手くいかなければペンサコーラに。ペンサコーラが上手くいかなければペプシコーラにでも行ってしまおうのでしょうか。次に試すものが何であれ問題ではありません。いつも次の流行があるのです。人々は何でも呑み込んでしまいます。なぜでしょうか。それは人々がカルトの一部に組み込まれているからです。人間に従っているのです。

「そうですね、でもみことばはあなたに聞き従ってはならないと言っています」と言っても何も変わりません。彼らは酷い束縛の下にあるからです。この種の人たちのために、その中の新生したクリスチャンは死んだような状態で、家族や結婚生活が崩壊してしまうのです。

それだけでなくカルト指導者たちはペテン師であり、詐欺師なのです。彼らは非常に不安定で、自分たちが知っていると思わせたい事柄について片鱗すら知りません。彼らは自分たちよりも物事を知っている人を恐れます。そのためにどんな種類の教育も学習も見下します。その人たちは教育を信奉している人たちと同じくらい酷いのです。

まさにアーノルド・フルクテンバウムが言ったことのように。「あなたがプリマス・ブラザレンであれ、オープン・ブラザレンであろうと私は気になりません。ただ無知なブラザレン（兄弟）にならないでください」

## ● サンヘドリンと同じ手口

カルト団体に救われ、カルトしか知らない場合は、そうなってしまうことも理解できます。ですが、カルトの団体を通して救われてもいないのに、そこに入ってしまう人はどうでしょう。その人たちはもっと哀れです。

カルト的教会に属していると、先に述べたようなパターンが見られます。指導者の行動の仕方は知識への恐れに基づいています。自分が知らないことを知っている人を警戒し他者をメッセンジャーに仕立て上げます。そして自分だけが聖書に関して特別な洞察力を持っていると主張し、それを理解しないものは反抗心を持っていて、権威に服従していないと迫ります。他の者はその人を責め、呪うような言葉を吐きます（カルト的教会の信者たちはいつもそのグルー

プから離れて、「死んだ」人のことについて話しますが、そこに留まっていて「死んでしまった」人については話そうとしません。彼らは物事の扱い方において非常にこだわりを持っています。このような人たちはサンヘドリン（ユダヤ最高議会）と同じように振る舞います。

イエスさまはサンヘドリンに向って言われました。「なぜあなたがたは私を捕まえて、いかさま裁判をするのか。なぜ私のいた神殿に来て、誰もが見える場所で訴えなかったのか」このような人たちは決して、ビデオカメラの前や聴衆の前で公に議論しようとはしません。彼らは仲間たちの前でしか事を起こせないのです。

ペンサコーラの欺き人、名ばかりの神学者で、「偉大なヘブライ語教授」と言われていたマイケル・ブラウン (*Michael Brown*) と私は話しましたが、彼がヘブライ語をひとつも話せないことに気付きました。彼は数年前にイスラエルに来て、イスラエルの樹木の 22 パーセントを燃やした森林火災が、イスラエルに注がれた神の聖霊のしるしだと主張していました。彼のもとには第二のペンテコステを毎晩熱心に待つ人たちがいました。彼はペンサコーラについて私とディベートをする予定になっていました。ディベートは平日のニューヨークの近くの教会でされる予定が立てられたので、中立の会場で、また誰も日曜礼拝に欠席することなく来られるようになっていました。ですがキルパトリック (*Kilpatrick* ペンサコーラの牧師) が「震えながら語る少女」について嘘を付いた証拠が映っているビデオを私が持っているとするやいなや、ブラウンはディベートをキャンセルしました。そして日曜日の夜、ペンサコーラの会場でディベートを行うよう求めてきたのです。なぜこのようなことをするのでしょうか。カルト指導者は自分の縄張りの中でしか戦おうとしないからです。

カルト指導者の手口は、いつでもイエスさまを裁判にかけたサンヘドリンの特徴を持っています。彼らは公に反対するのではなく、人々をコントロールできる場所で事を行います。彼らはフェアな戦い方をしようとしません。そうする能力も無ければ、勇気も無いからです。彼らは不安定な人たちです。これが彼らのやり方です。牙の無いタイガーを恐れているようなもので、その人たちはただの詐欺師なのです。

## ● 回復

人々がカルト的思考を中心とした人生から抜け出し、キリストを中心とした

人生に戻るには、何カ月、何年とかかる場合があります。これらの人は言葉に言い尽くせないほどの束縛のもとにいます。そしてあなたもそのような束縛のもとにいたことがなければ、どのような状況を通ってきたのか理解できません。人は問題の本質を掴むことができず、「あの人はなぜ打ち解けないのだろう」と思ってしまいます。

それだけでなく、カルト的教会にいた人たちは多くの真実を語ります。「教会はなまぬるい」「カルトはもっと熱心だった」「あなたたちはラオデキヤの教会だ」それはおおよそ真実です。ですがこれが非常に危険なのです。彼らは真赤な嘘を付いているのではなく、サタンの嘘——歪曲された真理を教えているのです。ですがその結果、損害を見てください。いつもカルトにはそれがつきまといます。

彼らは神学的には「教会」であり、社会的な「カルト」として始まります。ですが10年もいませんが、数年経つとどうなるでしょう。もうその頃には異端の教えが現れ、金銭的腐敗や、性的不品行が出て来ます。運が良ければ最後にイエスさまを見つけるでしょう。

このような束縛のもとにある人たちには聖書がこう語っています。

### **主の御霊のあるところには自由があります。(2コリント3章17節)**

束縛のもとにあること自体が神の霊でないことを物語っています。「主の御霊のあるところには自由があります」とあるからです。束縛のもとにあなたを閉じ込めているのは神の御霊ではなく、「党派心」、肉の行い、罪、御霊の実とは反対のものです。肉の行いは御霊の実とは正反対のものです。

束縛から抜け出すのに数カ月や、数年かかるかもしれませんが、大事なことはこれです。イエスに目を向けていれば、次の一節がかつて経験しなかったほどの現実となります。

### **ですから、もし子があなたがたを自由にするなら、あなたがたはほんとうに自由なのです。(ヨハネ8章36節)**

主の恵みがありますように。



<注釈>

※1

ウィリアム・ブランハム 1909－1965年

現代の信仰のことば運動に大きな影響を与えた人物

- 自分が死からよみがえると預言した
  - ウィリアム・ブランハムは、1977年に起こるとされた携挙の後、世界のすべての教派は世界教会協議会によって飲み込まれると偽りの預言を行った
  - 黙示録3章14節の御使いを自分のことだと主張
  - エバが蛇と性的関係を持ったと教えていた
  - 自分の教えを受け入れる者だけが救われると教えていた
  - 三位一体を悪霊の教えだと語っていた
- 「三位一体説は悪魔からのものだ！そう主が語られている」

※2

エセック・W・ケニヨン 1867－1948年

信仰のことば運動の「父祖」

「ニューエイジ」や「ニューソート」などのオカルトグループと直接に関わっていた。

現代の信仰のことばを教える教師たちと比べて、正統派に近かったが、彼の基本的な教えは次に要約される

1. 神は「信仰に満ちた言葉」を用いて語るにより天地を創造し、私たちも（小さな神々として）同じようにするよう召されている
2. 人は墮落したためサタンの性質を帯び、本来持っていた「神の支配権」を捨て去り、サタンを「法律的に」この世の神とした
3. イエスは肉体的に死んだだけでなく、霊的にも死んだ
4. 今、信者の肯定的な告白により、健康と富が得られる

この神学は、神とのみこころに従う代わりに、信者たちが小さな神々になろうとし、自分たちの言葉で「現実を作り出そう」とし、自分の力に焦点を当ててしまう結果に陥る。また彼の神学は、以下のような神の不変性という根本的な真理を否定してしまっている。

「イエス・キリストは、きのうもきょうも、いつまでも、同じです」ヘブル13章8節

「主であるわたしは変わることがない」マラキ3章6節